

平成二十年一月一日発行 第十八巻第一号 通巻第一九八号 毎月一回二日発行
平成二十年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

平成20年1月号

岡井省二創刊



初御空

高橋将夫

たまさかの運はのがさず去年今年
のびのびと槐並木の初御空
白山の水を含みし若菜かな
羽子板を飛び出してゐる写楽貌

回るのも止まるも定め喧嘩独楽
掌に乗せても暴れ回る独楽
秘め事の一つや二つ海鼠にも
押桶の籬のゆるみも松の内
どちらとも言へぬ狐と狸かな
公達の影が狐になる夕べ
白山の水美しき初御空

櫻

峯

雨村敏子

おほどかに大空はあり去年今年
春あけぼの槐の大樹に木霊ある
霧石に山の日移る福寿草
産土の春の土より水の音
樫の茎のくれなゐ考が家に
人日や朱筆洗うてをりにける
景德鎮の亀の水滴寒明くる
筆^ひ山^{ざん}へ母と二人やふきのたう
酒蔵の並びし獺の祭りかな
鏡川に橋の影あるつくしんぼ

筆山高知市の山

鏡川高知市の川

特別作品

土佐水木日曜市の骨董屋
のれそれや徳利の首に潮さして
にんげんに九つの穴薬ゆる
バツカスと泥目祭りの最中なり
涅槃西風海より揚ぐる阿古屋貝
札所まで菜の花ばたけ海を見に
涅槃会の明かりの中にあたりけり
花の山この山いくつ墓抱く
おぼろより鉦の聞こゆる和讃かな
いよいよよの快樂なりけり峯櫻

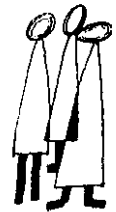
槐安集

水野恒彦

曼珠沙華けむりは西へ吾も西へ
赤く赤く鶴の折らるる真葛原
稲穂波レム睡眠のはじまりに
經典を船で運びし月下かな
濁りざけ見えぬ地震に火を焚けり

延広禎一

真二ツに冬瓜を割る大局観
九竅のよみがへりけりとろろ汁
妖精の息か葡萄酒醸さるる
虚栗を拾ひつづける小町かな
水分に権兵衛爺と瓜坊と



加藤みき

雨雲の上ををりけり初紅葉
真葛小さき顔のモデルたち
火祭や板もて囲ふ石燈籠
靄深しふたたび出会ふ秋の墓
数珠玉の乾びし音を天空に

石脇みはる

魚臭き塩釜港や秋あかね
野の秋の真ん中渦を巻いてをり
雲一つなき丹波なり焼松茸
鶏頭の頭でつかち子規忌かな
秋深し話の間の雨の音

中島陽華

鈴虫やまぶな調べの白拍子
石榴の実割るるや白眉呵呵大笑
ふくふくと八幡梨の実食しにけり
医師も子も舌出し合ふて水の秋
カンダカは釈迦の馬なり夜学果つ

竹内悦子

葉の暮れて瓢ばかりが揺れてをり
踏切に煙入りくる野分かな
枳殻の実都に仏待つてをり
日本海見下してをる曼珠沙華
秋海棠滝廉太郎のピアノかな

栗栖恵通子

天逝の匂ひ同じや流れ星
てのひらに生栗あぶく残しをり
御旅所の水のさわだち雁わたる
蛇穴の含み笑ひとなりにけり
実ざくろの口開いてをり鬼子母神

大島翠木

十三夜臍の緒何とせつなかり
冬瓜のおしろひ指でさはりけり
千切れ雲の沖の芯へと雁の棹
もしかしてやつぱり君か金木犀
とりつきし後の月なり埴輪の目

雨村敏子

天地や白桃にひと捌けの光ゲ
幾万の茸発光ダイオード
夕空に繋がつてゐし曼珠沙華
茸山に影の移りし西の塔
文鎮や涼しかりける夜の机

小形さとる

ふかぶかど日輪わたる自然生じねんじょう
花すすき薬堤など抱いてをる
神在の泡沫あわのはじける音ひとつ
ひとり撓たわみて十月のあぶら紙
そぞろ寒爪で傷つく念仏ねぶつ札ふだ

本多俊子

安倍川餅あべがわもちの黄粉も餡も子規忌かな
彼岸花地獄極楽天無限
晩節の見えざるがよし葦の花
秋の昼パブロ・ピカソに観られけり
妖精になりきつてゐる秋の蝶

天野きく江

コスモスの畑に入りしままの猫
思考力空つぽにして十三夜
百舌の空心を羽根にしてしまふ
燃す竹の弾けて秋の一日消ゆ
白波を立てて風ふく神の留守

槐市集

宇田喜美栄

鴉来る思へば通草熟るる頃
天空より零れ落ちたる群小鳥
山水を大葉に汲みし秋の空
笑ひ声遠くにありし秋の天
山畑にをり突然の秋の雷

大山里

天水に蟬落ち込んでしまひけり
嫌はれて褒められ背高泡立草
教室の人体隅に穴まどひ
さかのぼる秋の真水と群かもめ
そこだけが明るし雨の蕎麦畑

加藤富美子

礁冷や白鷺おのが身を映す
くりようかん妬み心のしばしあり
墓十墓松に声なき落種かな
八十路なる白き桔梗がのぞきをり
迸る水が伝へる山の秋

金澤明子

乗り継ぎのホームを雁の渡りかな
大陸に野分来てをる俄か雨
晩秋や夜汽車ランプの通過駅
秋簾郷に集ふも一くざり
片道の切符を挟む冬帽子



槐集

高橋将夫選

時間またばつたのやうに飛びにけり
福井 久津見風牛

かまきりの頓死迷宮入りとなり
曼陀羅へ膝押し合ひぬ枯すすき

白菜は噂話を巻き込めり
しろがねの奥底深しすすき原

熟れを待つ朱欒の風の重さかな
岡崎 岩月優美子

晩秋や野生馬の眼に愁ひある
パスカルの葦を探して日暮れたり

秋水に浮くものやがて沈むもの
天日を取り合つてゐる青蜜柑
枚方 中野 京子

秋の日の金の真砂を浴びてをり
白雲や桃むく肩のやはらかに
目に夕日胸に草の実あまたなり
仙崖や風にほつこり芋煮え
霧を吐き霧を吸ひこむ山の壺

秋天や禁断の実の色づくよ
岡崎 近藤 喜子

芒野のまんまんなかの浮力かな
行間に詩のあり秋気澄みてをり

鹿はつと立ち上がる木洩れ日の揺れ
日のあたりゐる悦惚の熟柿かな

鈍豆のふくらみに日のあつまりぬ
秋気澄み羅漢二体の耳うちす
枚方 近藤きくえ

筆柿の蕩けさうなる氷室口
つま立ちて銀波の燧灘さやか

微笑みの円空佛や萩の雨
月の人漢詩を読んでゐたりけり
木犀の匂ひここまで大飛出
谷村 幸子

熟寝^{うまいじ}児に鴝の高音はとどかさざり
鯛雲土に骨粉まぶしをり
条幅に筆のころがる初嵐

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

時間またばつたのやうに飛びにけり 久津見風牛
生涯のある時期における時間の心理的長さは年齢の逆数に比
例するといふ。例えば、六〇歳の時の時間は三〇歳の時の二倍
の速さで流れる。ジャーネーの法則である。私も一年がだんだん
短かくなるように感じている。作者の年齢になると時間はどう
やらバツタのように飛んで行くらしい。

熟れを待つ 朱變の風の重さかな 岩月優美子
一見なに事もなく、ごく自然に朱變は成熟してゆく。しかし、
作者はそこはかとなし重い雰囲気、重い風をそこに感じ取って
いる。朱變が熟れて重そうだったから、そう感じたなどという
短絡的なものではなからう。私はこの句に人の生涯を重ねて鑑
賞させてもらった。

白雲や桃むく肩のやはらかに 中野 京子
桃を剥きながら肩のやわらかさを詠んだ句に出会ったのはこ
れが初めて。桃のやわらかさ、桃を剥く所作のやわらかさ、白
雲のやわらかさ……やわらかさが実によく伝わってくる。

鹿はつと立ち上がる木洩れ日の揺れ 近藤 喜子
警戒心が強いのはなにも鹿に限ったことではないが、それに
しても木洩れ日の揺れに立ち上がるとは、なんとも繊細な鹿だ。
木洩れ日の揺れ方が想定外だったのかどうか、知る由もないが。

鈍豆のふくらみに日のあつまりぬ 近藤きくえ
硬そうな鈍豆だが、日が集まつてふくらんだとなると、その
豆の部分がいかにもふつくらとして見えてくる。

熟寝^{うまひ}児に鴝の高音はとどかさざり 谷村 幸子
鴝が高音で鳴いているが、稚児は何処吹く風とすやすや眠っ
ている。子供のかわいい寝顔が目につかぶ。

雷聲を収む 五色の金平糖 富松 寛子
「雷聲を収む」は七十二候の一つで、秋分の頃にあたる。こ
の頃になると雷も響かなくなるところからきているのである。
う。古い季語と五色の金平糖の取合せがおもしろい。おだやか
な秋の昼に金平糖をほおぼりながら、こんな一句をひねってみ
るのもまた一興。

山頂の池に集まる流れ星 中田 禎子
流れ星は文字通り流れ去るものなのに、山頂の池に集まった
という遊び心に共鳴。隕石がそんなに池に落ちたら大変とか、
山頂に人が集まると解しては詩情を欠く。流れ去ったはずの流
れ星が実は山頂の池に集まっているメルヘンと鑑賞した。

思へども山のむかふや秋刀魚焼く 近藤 公子
山の彼方にある夢の世界と、秋刀魚を焼いている現実との対
比が鮮やか。山の向こうにあるという作者の思いが気になるこ
ころ。(以下略)